

KOOL

人を魅了する演奏

演奏学科声楽専修

3年

大森智浩

人を魅了する演奏って難しい、ましてや自分の国のものでは無く西洋文化の物を日本人が演奏しなきゃいけない、外国語で歌うことに疑問を抱いていたときに、この本に出逢いました。

本の中ででてる、ある言葉にドキッとしました。その言葉とは「空っぽでナンセンス」な演奏という言葉でした。最初は頭にハテナがたくさん浮かび読み進めるうちに確かに！と頷き、いま自分が当たり前のようにドの音がドでありレはレであり、音名も読めて音階を歌えるということは、ほんの数十年前には難解だったこと、この本を読むと、いかに自分がいま恵まれた環境で勉強できているかに感謝しなくては、思われます。同時に、今の環境に満足する事無く、自分で切り拓いて行くことも大事だと思いました。

僕たち日本人が、西洋音楽を勉強するときに起こる多くの疑問。

学べば学ぶほど疑問は増え続け、たくさんの壁に突き当たる。そんな時、指揮者という立場での音楽のとらえ方や、紙谷先生の考え方が大変分かりやすく、なるほどと読んでいて腑に落ちていきます。

また、大切な事柄がユーモアを交えて書かれ

ていて、頭を抱えたり眉間にシワを寄せず、読む進めることができました。

同時に読み進めれば読み進めるほど演奏する上や、勉強していく中で自分に足りないもの、演奏する上で大切なことが明瞭になりました。本の一部を簡単に紹介すると、

「西欧音階では、和音の流れが心にもたらす作用への関心が不可欠な要素であるのに対し、日本人は主としてメロディーの上がり下がりをとらえて音楽の抑揚を感じているので、和音の変化を聴き取ってもそこに抑揚を感じない民族的な感性の特質を持つている旋律のラインへの関心は高いが、和音や他の音と作る響きには関心が低い」などと本を読んでいくと心にとどめておきたい言葉はたくさんでてきます。「演奏することは人に演奏を聴いてもらうことではなく、また聴かせることでもなく、何とか音楽を相手の心の奥深くへ届け、そこで心との対話をさせる…」という部分など、ハッとさせられる言葉が多いと感じました。文章にメーカーを引いたり付箋をつけて是非自分だけの一冊になるような読み方をおすすめしたいです。



『人を魅了する演奏』紙谷一衛著
角川学芸出版 2009
請求記号●J115-613

●おおもりとむひろ 音大は学費が高い(笑)少しでも元を取ってやるう精神でたたくさんのことに興味を示して勉強したい！専攻だけでなく音楽の総合的な力を身につけて卒業したい！そして専攻以外の人やたたくさんの人と知り合い新たな視点で音楽を見てみたい今日この頃。

CD

自分の目指す音楽

演奏学部ジャズ専修

3年

曲輪大地

『Roman Night』私が初めてTom Harrellというミュージシャンに出会ったCDでした。彼の音楽はとても暖かく、優しいなどの感情に満ちあふれています。CDのタイトルでもある『Roman Night』は私が音楽生活をしている中でとても衝撃を受けた曲でもありました。

Tom Harrellの音楽に出会ったきっかけは、私はまだ1年生の頃、音楽に対して色々悩んでいた時にジャズ専修・Saxの池田篤先生に「Tom Harrellっていうミュージシャンがいるから聴いてみるといいと思うよ。」と言っていたのがきっかけでした。それからCDショップで何となく手に取って見たのがこれでした。早速聴いてみると、素晴らしい音楽、そしてとても美しいトランペットの音色。私はすぐに彼の音楽にはまってしまいました。1曲目、2曲目と過ぎて3曲目『Roman Night』。私がかつてに聴いた事のないような、Tomの優しさに満ちあふれたフリーユージェルホーンの音色。これまでフリーユージェルはトランペットより柔らかい音が出るから、そのためだけの持ち替え楽器ぐらいにしか思ってたのですが、これを聴いてフリーユージェルに対しての思いが変わり

ました。彼のフリーユーゲルにはとても大きな感情が詰まっているように感じました。これがきっかけで私は自分の目指したい音楽が見えてきました。

昨年私はTOMが来日するというのを知り、Cotton Clubに行ってきました。そこで聴いた演奏はCDで聴いた以上に素晴らしいものでした。CDだけでは絶対にわからない、その場だけの空気、2度と同じものは生まれえない音楽。聴いていてとても感動して、涙が出そうになってしまいました。

もし、この記事を読んで少しでも興味がわいたら是非聴いてみてください。この《Roman Night》以外にもTom Harrellのリーダーアルバムは図書館にたくさん入っています。

今はジャズと言っても、様々なスタイルがあります。そんな中で私は彼のような、感情に満ちあふれたミュージシャンを目指したいです。



Photo credit : Angela Harrell

Tom Harrell 《Roman Night》
High Note HCD7207
請求記号●XD68260

●くるわだいち 大学生生活も半分を過ぎ、残りわずかになってきました。今でもたくさん悩んでいます。が、一つ一つしっかり乗り越えて成長していきたいと思えます。



音楽を俯瞰で見る

音楽文化デザイン学科コンピュータ音楽専攻 3年

宮本貴史

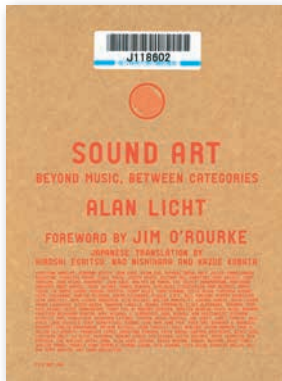
音大生はしばしば「音楽と美術はどう違うのか」または「どこまでが音楽で、どこからが美術なのか」などという話をすると思う。これは多くの音大生が、音楽と美術には明確な境界線がどこにあるのではないかと、思っているというところもあるだろう。しかし音楽も美術も常に相互に還元し合っているのは明らかだ。「明確な境界線」などというものは、考えるだけ無駄なような気がする。

音大に通っている必要以上に音楽を特別視してしまいうようになる。自分を納得させるだけの理由もなく、音楽は美術や文学などの他の芸術よりも圧倒的に素晴らしいものだと思ってしまう。もちろんその背景には音大という環境以前に、自分の過去や未来を肯定するための無意識下での働きもあるだろうから、しょうがないことだと思える。自分は音楽と同じくらい美術が好きだが、そもそも美術に興味を持ったのは、音楽が本場に他の芸術よりも素晴らしいものなのかどうかを確かめたいという思いがあったからだ。もちろん美術に興味を持って間もなく、音楽が特別素晴らしいという考えはどこかに消えた。

しかしそれは音楽も美術も同じようなものだ

という結論に至った訳ではない。美術と音楽で、表現したいものが同じということはあっても、異なるプロセスを経て、結果として全く違うカタチの作品になるということはままある。同じものを表現するにも、音楽家と美術家では異なるプロセスをたどり異なるカタチに仕上がるということは、享受する側も音楽と美術では異なる回路を使うべきなのではないか。そしてその回路は無意識のうちに使われているのではないかと思う。要するに音楽には音楽の聞き方、美術には美術の見方があるということだ。そしてサウンドアートの面白いところは、音楽を美術の見方で、美術を音楽の聞き方で感じることができるということだと思える。

サウンドアートについて書かれている本はこの図書館にもいくつかあるが、本書は音楽家の視点からサウンドアートについて書かれているため非常に親しみやすいと思う。美術に興味を持ち、延いては音楽をもっと好きになるきっかけになればと思う。



「サウンドアート：音楽の向こう側、耳と目の間」アラン・リクト著
窪開津広、西原尚訳
フィルムアート社 2010
請求記号●J1 18-602

●みやもとたかし どうせだったら自分がリクエストして入れてもらったCDとかを紹介すればよかった(笑)